

月例研究発表要旨

第 235 回 2007 年 6 月 20 日

「日本人学生に自律学習に役立つ考え方（メタ認知能力）を芽生えさせるにはどのようにすればよいか」

ラルフ・デーゲン

本報告は、同題の研究ノートとして今巻に掲載した。

第 236 回 2007 年 12 月 19 日

「モダニズムとアイデンティティ」

三浦玲一

Walter Benn Michaels の *Our America: Nativism, Modernism, Pluralism* (1995) の紹介そして検討を行った。いわゆる新歴史主義の流れから、1920 年代の合衆国の文学をあつかった本書は、同時期に出版されたいくつかの本とともに、アメリカのモダニスト文学研究に人種とアイデンティティという切り口を不可避なものとした、決定的な仕事である。

アメリカにとって 1920 年代とは、1921 年と 24 年の移民法改正に象徴されるように、新たな労働力として移住してきた移民たちが、社会的、政治的な問題とされた時代でもあった。そこに注視するとき、たとえば現在ではアメリカ小説を代表すると考えられるであろう古典 F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby*, Ernest Hemingway の *The Sun Also Rises*, William Faulkner の *The Sound and Fury* 等が、移民、とり

わけユダヤ人という形象にふかく依拠しながら成立していることがわかる。ギャツビーの富は、大リーグの八百長事件をしかけたとされるユダヤ人ウルフシェイムと関連づけられていて、そのことは彼の悲劇的な結末の前触れとなっているし、『日はまた昇る』は、じつに、ユダヤ人ロバート・コーンの紹介から始まり、主人公ジェイク・バーンズの比較の対象、引き立て役としてのコーンは、少なくとも作品の三分の二あたりまでは、主人公よりも目立ち続ける。ヘミングウェイのこの小説と比べれば、『響きと怒り』においてユダヤ人の果たす役割はずっと小さなものに見えるが、この作品の中心プロットが、キャディ・コムプソンの象徴的な純潔を守ることであるとき、それへの脅威としてある外部世界は、ユダヤ人によって支配された（と登場人物の一人が考える）東部金融資本に象徴される。

マイケルズの議論の核心は、しかし、これら作品がユダヤ人差別的に成立しているということではなく、その成立は、登場人物の人種を強調しないでは成り立たないように作品世界ができていくということの一部であり、それは、簡単に言えば、作品世界は登場人物をアイデンティティとして把握し描いているということであり、そして、このアイデンティティを重視するプロジェクトこそが、文学におけるモダニズムをモダニズムたらしめる根底なのだという指摘にある。

たとえば、当時の大統領カルヴィン・クーリッジは、ある演説で、「われわれは、決定的にアメリカ人でありたいという偉大

なる欲望をもっている」と発言している。「アメリカ人である」ということが欲望の対象になるとき、それは、単なる国籍でも帰属の対象でも、単なる遺伝でも生物学的な類型でも、ありえない。それは、誇りや情熱の対象としてのアイデンティティである。そして更に、「決定的にアメリカ人でありたい」と人が思うとき、そこには、アメリカ人である程度が高かったり低かったりすることがありえるような強度の概念が、そのアイデンティティには導入されている。このようなアイデンティティ概念が、実際には、よりアメリカ人でない者、もしくは、まったくアメリカ人ではありえない者を名指し、排除することで支えられることは、すでに多くのところで論じられている通りだ。だからこそ、アメリカ文学を作ったモダニストの古典は、(排除されるべき) ユダヤ人を必要としたのだ。

このような枠組をマイケルズは *nativist modernism* と呼ぶが、ただし、文学におけるモダニズムとは、通常、そのテーマのあり方からではなく、その実験的な言語観から定義される。かりにその時代のあらゆる作品が人種とアイデンティティを描いていたとしても、モダニズムは、人種やアイデンティティを描くからモダニズムなのではなく、(旧来のリアリズムから離れた) その実験的な表象への意識からモダニズムの名に値すると認識されるのである。そして、マイケルズの議論の白眉も、ここにある。

たとえば『響きと怒り』の最終章には、黒人の教会で語られる、その意味の判然としない「黒い」言葉が現われる。この動きは、同時代のハーレム・ルネッサンスとも、そして、これ以降の黒人文学(とその後の

種々のマイノリティ文学)の誕生ともリンクして、人種差別主義者であったフォークナーを、他方では、20世紀後半の種々の(広義の)ポストコロニアル文学の祖とする奇妙な逆転ともつながっている。ここにあるのは、アイデンティティ主義の文学的な結実、黒人の言葉は「黒い」言葉として、而して、白人の言葉は白い言葉として、アジア系の言葉はアジア系の言葉としてあるという認識、言語それ自体が、その意味とは別の次元において、話者のアイデンティティのマーカ―として認識されるようになるという事態である。

文学におけるモダニズムの言語的実験の本質が、いわゆる言語の物質性、言語が持つ、その「意味」以外の、経験される要素の発見だと考えるとき、その物質性とは、すなわち、主体をアイデンティティと捉えることに由来する、話者のアイデンティティのマーカ―としての言語という概念の誕生なのだとマイケルズは示唆している。

いささか時代はずれるが、たとえば、芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」という句に、その言葉の意味以上のなにか、「蛙が池に飛び込んだ音がした」という情報以上のなにかがあると信じ、そして、その「なにか」は日本人にしか理解できない、もしくは逆に、それを理解できる者こそが日本人であるとするとき、この定義不能な文学性と同じように定義不能な日本人性は、相互依存的に互いの存在を支えている。これこそがアイデンティティの文学の誕生である、というような認識を、マイケルズの議論は示唆しているのではないかというところで論を閉じた。

マイケルズの議論はやはりいくつかの質問、批判を呼び、なかなか同意されなかつ

たように思う。参加して下さった皆さん
に感謝する。